

### 1. 聖書の靈感

「聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。」( テモテ 3 : 16 )

これは著者パウロが旧約聖書をさして書いた言葉ですが、このことから聖書は神に靈感されて記された書物であると言うことができると信じます。また、新約聖書には次のようにも記されています。

「なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。」( ペテロ 1 : 21 )

では、聖書が靈感されているとは、どういうことなのかということについて、私の信じるところを以下に記します。

私はまず、聖書の機械的靈感説や口述筆記説のような、聖書が人間によって書かれたという側面を過小評価する説に、強く反発を覚えるとともに、そのようには靈感説を信じません。聖書の人間的な側面を否定することは、その書物の権威を主張するためには役に立つかもしれませんが、そこから生まれる信仰というものが知識や理性を否定するものになりかねないし、客観的な判断を受け入れない妄信を生み出す傾向があるからです。

次に、近代の聖書批評学の影響によって主張されるところの、聖書に誤りがあるとする立場にも、当然賛成できません。「誤りのある部分」と「誤りのない部分」というふうに靈感を限定しようとするのは、その取舍選択が何を根拠に、また首尾一貫してなしうるのかという問いを生じ、ついには聖書全体が単なる人間の書いた書物であるという主張に反論できなくなってしまいます。それゆえ、私は様々な部分靈感説を退けます。

私は、この靈感説の両極を退けながら、その間でバランスの取れた立場に立ちたいと願っています。これはキリストの神性と人性の問題、すなわちキリスト論の問題に通ずるものであると思います。カルケドン信条において「各性に固有なるものはむしろ保たれ、一つの人格また一つの存在として統合せられ、二つの人格に分かたれず、また分割されず、一にして同一者なる御子、また独り子、御言葉なる神、イエス・キリストにましませり」と宣言されるように、キリストにおいてこの両性はその固有性において保たれ、かつ、一つの存在として統合せられるのです。とすれば、その御言葉においても同様のことが言えるのではないのでしょうか。

聖書は、その記者たちの性格、関心、背景、個性、文体の特徴などを用いて記されたものであり、ある意味ではその限界の中で書かれたものです。これが聖書の人間的側面であります。それゆえ聖書は解釈を必要とし、釈義をする際に、原語の分析と時代背景、そしてその

前後関係を踏まえて解釈がなされる必要があります。ですから、日本にある言霊信仰のような靈感の理解とは、はっきりと区別されるべきでしょう。

そして、聖書はその記者たちが聖霊によって影響され、その結果として神的な真実性を与えられるようになった書物であると、私は信じます。また、聖書は神の啓示を証するだけでなく、それ自体が啓示の一部であると信じます。

また、聖書の無誤性と無謬性については、近年になって、例えば啓示にかかわること・救いにかかわることについては誤りがないが、歴史や科学にかかわる事柄については誤りがあるという限定的無誤性を主張しつつ、しかし無謬性を受け入れる立場が現れてきましたが、私はその立場を擁護したいと思います。ただし、「誤りがある」という表現については聖書の靈感を信じるものにとってはふさわしくないとします。むしろ「限界」と表現するべきではないでしょうか。聖書は確かに時代的制約を受けています。パウロの世界観では、世界とは当時のローマ帝国支配化のヨーロッパ地域だけを指していました（コロサイ 1：6）。また女はかぶりものをかぶるように命じ、男は髪を伸ばすことを禁じられたり、現代的には適用できないことが出てきます。旧約聖書に至っては聖絶の問題や、様々な時代と文化の違いを、現代との間に見出すでしょうし、その慣習を理解せずにはわからないところが数多くあります。しかし、それは誤りなのではなく、その時代と文化の限界であり、聖書記者もその限界の中で聖書を記したのです。それゆえ、そのような限界は、誤りとみなしてしまうのではなく、聖書の研究と様々な考古学的知識・歴史的知識・文化的知識を踏襲することで乗り越えることができるし、その上で靈感された聖書を神の啓示として・無謬の書物として読むことができるのではないのでしょうか。

また、聖書の靈感との関連で、聖書の正典性について少しだけ記しておきます。聖書は使徒的伝承であるという点で、キリスト教会が有する他の諸伝承と区別されます。またパウロが「わたしが最も大事なこととしてあなたがたに伝えたのは、わたし自身も受けたことであった」（コリント 15：3）と言うように、その伝承もいくつかの層から成り立っており、重層的であるということです。そして、まず伝承が存在し、いくつかの層の伝承が寄り集まって正典結集へと流れ込んでいったのです。しかしその場合重要なのは、正典結集にあたって使徒的伝承との関係から聖書は正典として採用されたということです。

最後に聖書の自己証明力について、私は宗教改革者たちがローマ・カトリシズムとの対決において主張したことに同意します。カルヴァンが次のように記すとおりです。

「聖霊によって内的に教えを受けたものたちは、聖書のうちにしっかりと安らう。また、聖書は『アウトピストス (autopistoj それ自身において信じられるべきもの)』である。したがって、証明や理論づけの下に置くべきものでは決してないが、われわれが持つにふさわしい確実さは、御霊の証しによって得られるのである。というのは、聖書はそれ自身の尊厳さによって十分に尊ばれるものではあるが、しかも、それが御霊によってわれわれの心のうち

に証印されるまでは、われわれに厳粛な感銘を与えることがないからである。」ここでは聖書の自己証明力をはっきりと認めながら、且つその聖書が私たちに感銘を与えるためには御霊の内的証しが必要であることをカルヴァンは言っています。それゆえ、私も聖書自身が自己証明力を持ち、自分で自分自身を権威づけるものであると同時に、それが私たちをして救いに導き、教え・戒め・矯正し、義の訓練を与えるのは御霊の働きによると信じます。すなわち、聖霊は御言葉を通して働かれるということです。

## 2. 三位一体

三位一体論については様々な角度からの議論があり、現代においても議論され続けている神学的テーマですが、それらを踏まえながらも、短く自分の信じるところだけを記しておきます。

創造、墮罪、和解、完成という救済史的過程において、神ご自身の顕現というものは進展しており、父と子と聖霊のそれぞれが神性を有するということが明らかになるのは、新約聖書に至ってからです。また、それも理論的に展開されているわけではなく、各書簡に散りばめられているわけです。にもかかわらず、それらを総合すれば、子と聖霊の神性は明らかであり、礼拝され信じられる存在であると言えます。

しかし、それだけでは単純に三神論になってしまいますし、神は唯一であるという律法の言葉に矛盾する思想を肯定することになってしまいます。それゆえ、古代の教会において、三位一体論争とキリスト論争が展開され、その都度行われる公会議において信条が形成され、聖書全体に矛盾を起こさず、且つ礼拝されるところの三位一体の神についての論が築かれていったのです。それらをいちいち考察していると、膨大な量になりますので、私が使徒信条、ニケア・コンスタンティノポリス信条、カルケドン信条、アタナシオス信条の告白に同意し、そのように信じていることをここに記しておきます。

その上で、簡単に自分の言葉で信じるころの三位一体を言い表すとすれば、神には三つの人格があります。この人格とはあるものの固有な性質を指しており、父と子と聖霊と区別されるような固有性をそれぞれが持っているということです。子を生むことは父に固有なことですし、父から生まれることは子に固有なことです。そして、父から出る（発出する）ことは聖霊に固有なことです。しかし、本質においては同一であり、力と栄光において全く同等な、唯一まことの永遠に生きておられる神様です。この本質が同一であるということ、古代の神学者たちはホモウーシオス（同一本質）という言葉であらわしました。これは同じという意味のホモと、本質という意味のウーシアを合わせた言葉で、父のみならず、子と聖霊も神であり、この同一本質において神は唯一であると言えるのです。それゆえこの父と子と聖霊という三位一体の神のみが神であって、唯一であり、他の神々を神としてはならないのです。

このような正統信仰に立ちながら、私は次の神論を退けます。

三神論...多神教は聖書の否定するところであるので、当然です。モルモン教がこれにあたります。

勢力論モナルキア主義...イエスは単なる人間であったが、洗礼のとき聖霊を通して神の力を受け、神性を得て、神の養子とされたとするいわゆる「養子論」です。これは神の単一性を堅持しようと試みた結果生まれた説です。ものみの塔がこれに近いでしょう。

様態論モナルキア主義...キリストの神性の強調によって神の単一性を堅持しようと試みた説です。神は単一者であって、父・子・聖霊は同一の神の異なった顕現様態に過ぎないとし、キリストは天父自身の歴史における顕現様態であり、キリストの受難は父なる神ご自身の受難であると主張します。いわゆる「天父受難説」です。天父受難説ではありませんが、ワンネスもしくはジーザス・オンリーの考え方は明らかに様態論モナルキアです。

### 3 . 人間の墮落と人間本来の状態

「そのようにして神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ。それは非常によかった」(創世記 1 : 31)とあるように、神の被造物はその原初形態においては非常によいものであったのです。その意味は、存在そのものが神に祝福されており、ありのままでよい存在であったことが明らかにされています。その性質は神とその命令に従順なものでした。そして、次のように記されています。「神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された」(創世記 1 : 27)。この「かたち」は自然的像と道徳的像を意味します。自然的像とは、知性、良心、道徳的自己決定の能力、来世の予感、抽象理念を扱う知性的能力などを指します。また道徳的像は「聖潔」あるいは倫理性という言葉で表されるものです。これらの点において、人間は神の似姿に想像されたのであり、それは「よかった」のであります。そして、人間は本来神との関係において親しく、まことの神を愛し、それに従うものでした。そして、神から任された地を正しく治めていたのです。人間は神とその被造物との関係において平和に暮らしていたということができません。

人間の墮落とはそのような神との正しい関係を保っていた原初形態からの墮落でした。創世記 3 章に記される善悪の知識の木の実を食べるといふ記事は、それを食べてはならないという神の命令に対する不従順という罪を明らかにし、それ以来人間は神への不従順の歴史をつくりあげることになるのです。この墮落というものがアダムから始まり、その結果としての死が全ての人に及んでいることを、パウロはローマ人への手紙 5 : 14 にしるしています。キリストの血による贖いというものが、神との和解をもたらすというパウロの言葉からもわかるとおり、人間の墮落は、人間が神との平和を失い、人間のあるべき姿である「神のかた」

が壊されて、その本質において腐敗してしまったことを表しています。

#### 4．あがないの必要及びその性質

上記のような人間の窮状に対して、神様からの救済の手が伸ばされてきました。それは贖罪です。贖罪は神の愛の行為であり、人の側の功績によるのではなく、神様の側からの一方的なあわれみによってのみ救いを与えるという、神の側からの働きかけです。アブラハムは神を信じて義と認められました。すなわち救われたのです。すべての聖徒は神を信じて義とされたのです。ここには人間の側の何の功績も認められません。また旧約聖書に記されているところの、動物の犠牲による贖罪の儀式はすべてイエス・キリストの身代わりの死を指し示すところの予型であり、それは影に過ぎず本体はキリストにあります。キリストの来臨という出来事は神の愛の行為であり、その謙卑と従順と死は私たち罪人をあがなうためのものでした。

この贖罪は、和解の概念とともに救済の概念をも含みます。つまり、「買い戻す」という概念です。代価を払って買い戻す、あるいは自由にするという贖罪は、正に神の独り子のいのちを払って、私たちをして罪という主人の支配下から解放するということを成し遂げます。

キリストが十字架に架けられ、殺されたのは、人類の罪の故であり、その身代わりとしての死でした。本来ならば私たちが受けなければならない罪の罰、すなわち肉体的死と神から捨てられるその最終的裁きを、なんと独り子であるキリストが身代わりに受けてくださったのです。十字架は神の二つの性質を明確に現しています。すなわち、神は罪を憎むお方であり、また、神は罪人を愛される方である、ということです。

このキリストの十字架においてキリストの人性と神性というキリスト論の問題が現れます。そして、仲保者がまことの神でありまことの人であられる必要性が明らかにされるのです。まことの神でなければ、その受難に耐えることは出来ず、また、まことの人でなければ、人類の身代わりの死とはなりません。神と人とを和解させる仲保者は、神でも人でもあり、しかも一人格においてそうでなければならなかったのです（ウェストミンスター大教理問答問 40 参照）。

#### 5．キリストの復活、昇天、再臨

キリストの死は、確実に、また医学的に判断できるところの死でした。つまり昏睡状態であったとか、蘇生できるような状態であったとかいうものではなく、確かに死んだのです。

しかし、キリストは三日目に復活されたのです。それは肉体の復活でした。幽霊のようなものではなく、食事をしたりする肉体だったのです。しかし、死ぬ前のイエスの体とは違いました。それは正に復活体だったのです。突然消えたり、急に現れたりなさいました。また、当時生きていた全ての人に現れたのではなく、弟子たちの間に現れたのです。

そしてキリストは復活後 40 日たって、人間性において、可視的に最高の天にのぼられたのです。そして、神の右の座に着座されました。それはキリストが全ての名に勝る名を父なる神からお受けになったことを示しています。つまり、イエス・キリストこそ全世界の王、その支配者であり、このお方の許しなしには何も起こらず、この御名を通してしか救われないということを示しているのです。

また、キリストはいつの日か世を裁くために再び来られます。その時すべての人はよみがえらせられ、そして裁かれます。一方はよみがえらせられて裁かれ、そして地獄へ投げ込まれます。そしてもう一方はよみがえらせられて、キリストとともに神の国を相続します。

## 6 . 聖霊の御業及びその内住と賜物

聖霊は上記のキリストの十字架の死と復活によってなされた神の恵みのみ業を、信じるものに適用します。これこそ聖霊の御業であり、有効召命というわれるものです。神を信じる信仰も聖霊の働きによるものであり、神の先行恩寵といわれるものによって生じるのです。そして、信じるものに適用された神のみ業は次のような恵みを信仰者に与えます。

すなわち、罪の赦し（律法ののろいからの解放）、神の義、神との平和（和解）、永遠のいのち、聖霊の内住とその賜物です。

そして、聖霊は信じる全てのもののうちに住まれ、信仰者を有機的に結び付け、キリストの体なる教会の各器官として一人一人をつなぎ合わせます。そのとき、それぞれに聖霊の賜物が与えられるのですが、それらは体の各器官として機能するために信者に与えられるのであり、お互いに仕え合うためのものです。それゆえ、聖霊の働きは教會的働きであると言えます。そして、聖霊は我々を終わりに至るまで、有効に導いてくださると私は信じます。それゆえ、私は聖徒の堅忍の教理を信じています。

また、昨今のカリスマ・ペンテコステの運動について言及しておきたいと思います。特に聖霊の内住、その満たし、賜物という点について、彼らは特異な教理を展開して特異な実践をしていますが、私は聖霊の満たしには異言が伴うとかいった教理を信じません。そういう意味では第二の体験としての「きよめ体験」をも信じません。なぜなら、何らかの形でその経験に普遍性を主張することは、聖書全体を読んでも正しくないからです。もしも普遍性があるとしたらそれは福音を信じて救われるということなのです。しかし、これも信仰者に限ったの普遍性です。私は異言の賜物が今も与えられることを信じています。ですから、ディスプレイションナリズムの立場には立ちません。これは終末論においてもそうです。また、きよめについてもその体験を否定するつもりはないのですが、私はむしろ漸進的なきよめのほうを強調します。ましてやこれを第 2 の体験として人々にアピールすることは不自然なことであると思います。

むしろ、御霊の実である、愛・喜び・平安・寛容・親切・善意・誠実・柔和・自制という

品性が築き上げられることを、互いに追い求めていくことのほうが、聖書において明確に要求されていることであると私は思います。そして、この作業は生涯わたってなされるべきことです。

## 7．健全なクリスチャンの性格をあらわす特質

どのような性格を持つべきかとか、その特質は何かという問いは、信仰者の実状に則しておらず、むしろ、その特質を現せたり、自分の罪性に負けて現せなかったりと、信仰者の歩みは日々戦いではないかと思えます。それゆえ、むしろ目指すべき目標としてのみ言うことしか許されないと思えますので、それだけ記しておきます。それはイエス様が言われた二つのこと。すなわち、神を愛し人を愛することです。具体的には神礼拝と人への奉仕でしょう。これこそ、神の命令であり、私たちが目指すところです。また敢えて言うなら、その特質は上述の御霊の実でしょう。

## 8．審判及び終末

「また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところに従って、自分の行ないに応じてさばかれた。海はその中にいる死者を出し、死もハデスも、その中にいる死者を出した。そして人々はおのこの自分の行ないに応じてさばかれた。それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。」(黙示録 20：12～15)

これは最後の審判と言われる記事ですが、私は黙示録という書が、黙示文学であって様々な象徴表現と隠喩を用いて表現されているために、単純に読んで理解できるものだとは思っていません。ですから、このようなところを読むときも細心の注意を必要とするのですが、他の書簡においても同じような表現で審判が語られているため、思想的調和があると判断して、ここをそのまま字義どおりに解釈しても差し支えないかと思えます。そこで、私は最終的な神の裁きがあると信じています。具体的にどういった裁きがあるのかは、私は審判者ではありませんのでわかりませんが、ただ「御子を信じるものはさばかれぬ」というヨハネ福音書の言葉がありますので、イエス・キリストを信じるかどうかということが審判の際の重要なカギとなると信じます。幼児や福音未伝達者のさばきはどうかといったことがよく議論されますが、私にはわかりません。ただ、言えることは、宗教改革者たちが主張したように、救いは神の恵みであり、恩寵であるということです。神様が人間から「なぜあの人たちは救われぬのか」といって文句を言われる筋合いはありませんし、神様に人間を救う義務などないのです。人間は自らの責任で墮落しました。その罪人を救うことは神

様の一方的なあわれみと自発的な愛による行為なのです。そういう意味で、私たちの使命はただ、この神の愛の行為である福音を告げ知らせ、その神の愛のうちにお互い仕えあうことではないかと思えます。さばきはただ神様にゆだねるしかありません。

終末については今が終末に突入していると私は信じています。つまり、キリストの来臨以降、「神の国は近づいた」とヨハネが証言したように、神の国はキリストとともにやってきたのです。それは福音を信じて救われたものが、サタンの支配から神の支配へ移され、神との平和の内に神とともに歩めるようになったことを指します。終末とは神の国の到来です。それは今既に始まっています。教会はその終末的しるしであると言えます。神の国とは政治的国家を指すのではなく、その支配を意味しますので、教会というキリストの体を通して神の支配がこの世に表されていっているのです。そして、キリストの再臨はその終末の完成であるといえます。

福音主義陣営の終末論において千年王国説がよく言われますが、私自身は前千年王国説の立場を信じません。この説は黙示録の解釈においてミスを犯していることが多いからです。黙示録はあくまで黙示文学であり、ダニエル書と同じように、当時の出来事を様々な象徴表現と隠喩を用いて、読者であるキリスト者にのみわかるように書かれた書なのです。他にもマタイ福音書 24 章も黙示的要素があり、旧約聖書にある象徴表現を踏襲しているのです。それをユダヤの文化を知らず、時代背景も無視するファンダメンタリストが字義どおりに解釈すればそりゃおかしくなるはずです。また、この説はキリストの再臨により地上に千年間の神聖政治国家ができると主張します。それも、イエス様はエルサレムに入城しそのころには神殿が建っているというのですから、実にファンタジーです。少しエホバの証人の終末論に似ています。今はエルサレムにイスラム教の寺院が建っており、ユダヤ人は嘆きの壁で救世主の到来を待ち、神殿が回復されることを願っています。もしそこに神殿が建つとすれば、それは大きな政治問題となるでしょう。1948 年のイスラエル建国が神のみ心だとか、イスラム教はサタンの宗教なのでその国家も神によって駆逐されるだとか、こういった発言はユダヤ教の保守派の意見であり、キリスト教会が言うのはどうかと思えます。そこに至るまでに多くの人の血が流され、幼子たちの血が流されてきたのです。そのような戦争と殺戮を肯定するような意見を教会は言うべきではないと思えます。

キリストの来臨以降、「神の国はあなたがたのただ中にある」とイエス様が言われたように、主を信じるものたちの間に神の支配は拡大されることとなりました。そして、神殿とは私たち自身を指すようになったのです。そして、神の支配に入るためには、ユダヤ人もギリシャ人も、男も女も、奴隷も自由人も、何の差別もありません。ましてや国家的あるいは地理的優劣があるなどは到底思えません。

それゆえ、私は無千年王国説か後千年王国説の立場であると思えます。さらにどちらかと言えば後千年王国説に近い終末論を信じていると思えます。